

江戸時代には「商」が下品とされた。何かを錢であがなうということが不浄とされる建前があった。現代の日本でも、そうした社会通念が依然として存在するように見える。「おかね」に携わる仕事をする読者の皆さんは、「おかね」をどう感じているだろうか。

「おかね」を語ろうとするとき、私はついこの人のことを思いだしてしまふ。マネジメントの父と呼ばれるP・F・ドラッカーの絶賛した実業家、洪沢栄一のことだ。

不浄で、下品なものとされた「商」と「おかね」。しかし、幕末・明治期には、経済的な発展が国の基盤として不可欠のことであった。現代もまたしかりだろう。では、ドラッカーの絶賛した洪沢栄一の特質とは何だったのか。

『マネジメント』の序文では「経営の『社会的責任』について論じた歴史的人物の中で、かの偉大な明治を築いた偉大な人物の一人である洪沢栄一の右に出るものを知らない」「彼は世界のだれよりも早く、経営の本質は『責任』にはかならないということを見抜いていたのである」等と絶賛している。

洪沢は生前「わたしが、もし一身一家の富むことばかり考えたら、三井や岩崎にも負けなかつたらう」と発言したという。

私が書くまでもないことだが、洪沢は五〇〇にも及ぶ企業を設立した大実業家である。そのことから、戦後、洪沢家はGHQの財閥指定を受けた。しかしその後、GHQの方から財閥指定の解除が申し渡された。洪沢家は裕福ではあったが、財閥と呼べるほどの資産



絵・江口修平

歴史という 実験装置の中で

中野信子

を持つていなかったためだ。

彼の「商」に対する姿勢は、フランス留学中に学んだサン＝シモン主義に影響されている。経済的發展と道徳的規範に則る行動が相剋そうごくしないことに洪沢は着目した。そして、日本的な倫理観と「商」とを合体させ、経営者としてこれを実社会で成功させるというアクロバットをやつてのけた。

目先の利益があるとき、ヒトは欲望あつがに抗うことは難しい。しかし、行動学的な研究によれば、目先の欲求を我慢できるタイプのヒトが、長期的に見て高い社会的地位を得るといふことが明らかになっている。みもふたもない言い方をするなら、目先の利益につられない人が、年取も高くなり、出世もするということだ。

洪沢栄一の試みはまるで壮大な社会実験を見ているかのようである。一個人としての彼の選択が正しかったことは、一世紀を経て実証されたといえそうだ。ひとつ舵を取り間違えれば、日本は一握りの「下品な」超富裕層が「清貧な」国民から搾取する国になってしまうところだった。観念を操ることによって経済的な搾取を行う。そうした構造を持つ国もたくさんある。日本では中流層に厚みがあり、この層が比較的豊かであるのは、洪沢の試みが成功したからだともいえる。

和の規範と洋の商才を見事に融合させた洪沢の「おかね」の扱い方。欧米でしばしば話題になることがあるが、百年後を見越した意思決定ができるか、一世紀後の世界をみすえて行動することができるのかどうか。私たちもいま、歴史という実験装置の中で、試され続けているのかもしれない。

なかののぶこ●1975年東京生まれ。東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了。世界で上位2%のIQ所有者のみが入会できるMENS Aの会員。科学の視点から人間社会で起こりうる現象および人物を読み解く語り口に定評がある。現在、脳や心理学をテーマに研究や執筆の活動を精力的に行っている。著書に『脳はどこまでコントロールできるか?』（ベストセラーズ）、『努力不要論』（フォレスト出版）、『あなたの脳のしつけ方』（青春出版社）などがある。

